（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　松岡智子

東京美術学校で黒田清輝の薫陶を受け、パリとベルギーに留学した児島虎次郎は、大原美術館開館時の核となる西洋絵画作品の収集に奔走した美術品収集者としての活躍が知られる一方、１９２０年にはフランスのサロン・ド・ラ・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール（以降、サロン・ナショナル）の日本人最初の正会員に選ばれるというパリ画壇での活躍にもかかわらず、日本近代洋画史の研究において等閑視されていた。

本論文の筆者が、画家の残した１９冊の日記や画家宛の書簡類からなる「児島家文書」の現在の保管者（児島塊太郎氏）から、すべての文書の閲覧許可と大原美術館の協力を得て本格的な研究に取り組むまでは、実際にほとんど研究に進捗はみられなかった。

本論文は３部各３章の構成からなる。第１部で画家の生涯と画業を、筆者の共編著『児島虎次郎』（１９９９年刊）をも踏まえ、近代洋画史の視点から跡づける。第２部各章では、画家にとり重要な３作品、１９０７年皇室買い上げとなった出世作《なさけの庭》、１９２０年のサロン・ナショナルに出品しフランス政府買い上げとなった後、長らく未公開であった《秋》、未完の遺作となった明治神宮聖徳記念絵画のための連作壁画のひとつ、《対露戦線布告御前会議》の下絵を取り上げ、本格的な作品論を展開する。《なさけの庭》と《秋》は、黒田清輝の提唱する「構想画」を目ざしたもので、キリスト教の「慈愛」の図像と、画家が朝鮮旅行の折りに李王家博物館でみた弥勒菩薩半迦思惟像の手の仕草をそれぞれ発想源として、前者が「慈愛」、後者が日本の侵略に遭遇した国「朝鮮」もしくは弥勒菩薩に代表される東洋の「慈愛」を表現する一方、《対露戦線布告御前会議》は児島が心血を注いだ唯一の「歴史画」であり、長卓の左右にそれぞれ５人を配し、中央奥に真正面向きに明治天皇を座らせた縦長構図は画家がベルリン国立美術館訪問の際に見たに違いないエルトマン・フンメルの異例に縦長の《最後の晩餐》を参考にして、明治天皇に西洋の聖画像にみられる構図的ハイラルキーの中心と厳粛な正面観を与えている、と論ずる。

第３部は、画家の日記のほか、サロン・ナショナルの重鎮画家アマン＝ジャンらの画家宛ての書簡や外務省外交史料館の史料を基に、画家の美術品収集活動を詳細に追い、成果として例えば、１９２２年パリ「日本美術展」と、実現しなかった翌年の「現代フランス美術展」の最初の発案者が、実はアマン＝ジャンと児島虎次郎であったことを突き止めた。

未刊行の一次資料を精査して児島虎次郎の画歴に多くの新知見をもたらすとともに、画家が実見した外国作品を比較材料にして主要作品の美術作品の美術史的意義を引き出すことに成功しており、日本近代洋画史研究に少なからぬ貢献を果たす論文として評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。